

電波高校時代の一駒

昭和二十年九月終戦で復員、二十三年四月仙台国立無線電信講習所に入學するまで、生家で農業を手伝っていた。

軍隊で習い憶えた無線通信術で身を立terると決心し、日本で二カ所しか無い学校に無事合格した。

原ノ町の叔父、菊田魚店に下宿、通學、一年間お世話になったが、その間一回菊田富美子、(三歳位だったか)を休みが続いた時、負ぶって自転車で平沢に連れて行った。

富美子は兄雄一郎と先妻(たまちゃん)の子で、母親は兄の許より曲竹の生家に帰り、出産した長女だ。菊田魚店の親戚で同じ魚店を経営していて、子供に恵まれない、菊田朝治(ともじ)きよ、夫妻の養子になった。

兄達は憎しみ合って別れたのでは無い。農家の仕事がつくたくて勤まらなかつたようだ。洋裁の先生をしていた体である。農仕事はしなくてもよいから戻つて来るよう、人伝に説得した。

兄は夜中に戻つて来るのではないかと、寢室の裏口戸の鍵は掛けなかつたと後で聞いた。兄はどんな気持ちで一人寝して居たのだろう。

兄も両親も諦め、再婚の話しも進み、間もなく結婚となつてから、戻りたいと申し入れがあつたが、もう遅い、子供を養子に出したし、再婚の相手の信義に悖る。たまちゃんもどんな気持ちだつたらう。

富美子が居る菊田魚店は、国道四五線沿い今の電話局より少し下つたあたりだ。負ぶって平沢に向かう。国道四号線を南下、千代大橋や名取大橋の上に来ると、富美子は「コワイ」と言つて背中で見がつく、あの当時は道幅も狭いし、橋も貧弱だ。大河原、村田、割山の坂は、自転車を降りて登る。三時間はかかつたと思う。殆どの道は砂利道だ。やっと生家に到着、兄や両親に喜ばれた。

富美子を連れて行ったのは、私には下心があつた。曲竹の生母「たまちゃん」に会わせたかつたのだ。休む暇もなく、コッ

ソリ富美子を連れて約五キロある曲竹に行く、隣の奥さんに、たまちゃんを呼び出してもらい、道端で会わせた。生後一〇五日（食い初め）に別れてから約三年、可愛い盛り腹を痛めた我が子である。涙ぐんでだっこしていた姿が目には浮ぶ。

次の日、きよちゃんは早々と予告なしに富美子をタクシーで迎いに来た。蝶よ花よと大事に育てて居たから、心配だったのだろう。私がたまちゃんに会わせなかつたら、一生会えなかつたかも知れない。それから二十何年かが過ぎ富美子が結婚、子供が生まれてから、生母に再会、交際するようになったのも、私の「お節介」である。

題名から逸れるが、記して置く。

富美子達の生活が安定してくると、生母に会いたいのは誰しも同じだろう、私に相談をかけてきた。私はたまちゃんが何処に居るか知らない。まさか曲竹に聞きに行くわけにはいかない。人づてに聞けば、角田の農家に嫁いでいると言う、そこまです分つても五里霧中だ。

幸い角田には、かをるちゃんと云う同級生が嫁いで居る。やつと尋ね当てた日が、部落の祭礼だった、訳を話したら、知つて居るから後で案内する、先ずはお祭りのお赤飯を食べてから、と、ご馳走になり、一キロ位離れているたまちゃんを家の前の道路に呼び出し、わけを話した。

旦那さんから常日頃、機会があつたら、遠慮無く交際したらどうか、と云われて居たと云う。かをるちゃんと居間に通され、お茶を飲みながら、いろいろな話しを聞いた。再婚後男の子が一人産まれ、高校生だと云っていた。

その後日を置かないで、富美子を連れて行き、親子の再会を見届けた。お付き合いの様子などは、詳しくは知らない。たまちゃんが逝くまで、親子、姉弟として深く付き合つて居た様だ。同級生のかをるちゃんも、十年程前に、亡くなったそつだ。

兄も五十九才で逝ってしまった。人生は虚しい。